発掘調査の概要

興福寺東金堂院北面回廊の調査（平城第649次）

奈良文化財研究所では、これまで興福寺境内の調査を積み重ねてきました。2020年からは東金堂院の回廊と門の調査を継続しています。今回の調査は、東金堂院の北面の回廊の規模と構造をあきらかにすることを目的に、興福寺国宝館の南側に調査区を設定しておこないました。

東金堂院は中金堂院の東に位置し、東金堂と五重塔を中心とする区画です。周囲を単廊と築地塀で取り囲んでいたとみられ、北面と西面が礎石建ちの単廊、東面と南面が築地塀と考えられています。奈良時代の興福寺境内の様子を伝える『興福寺流記』（平安時代末頃成立）によると、東金堂は神亀３年（726）、五重塔は天平２年（730）の創建で、東金堂院の門・回廊・築地塀も同時期に建てられたとみられます。創建以後、東金堂と五重塔は５回の火災に遭い、現存する東金堂と五重塔は室町時代に再建されたものです。

今回の調査区は335㎡で、うち12㎡が1975･76年の調査区と重複します。以前の発掘調査では、東金堂の北側で北面回廊の基壇や礎石を検出しており、一部の礎石は現在も地表に露出しています。

検出した遺構は、北面回廊の一部（東西約28m）と、回廊が廃絶した後の石組溝や、江戸時代の絵図等に描かれている参道の一部です。回廊については、礎石やその据付穴・抜取穴、基壇および基壇外装や雨落溝を検出しました。

北面回廊についてみていきましょう。回廊の礎石やその据付穴・抜取穴を12ヵ所で検出し、桁行７間分を確認しました。このうち、７ヵ所に礎石が残存していました。北面回廊は梁行１間の単廊で、柱間寸法は桁行が約3.4m（11.5尺）等間で、梁行は約3.5m（12尺）となります。回廊の規模と構造は、これまでの調査で判明している北面回廊の成果と整合します。礎石は直径ないし一辺が0.5～0.8mの大きさで、厚みは0.3～0.5mです。石材は安山岩と花崗岩で、柱座をつくり出さない自然石が用いられています。一部の礎石には柱が立っていた痕跡と被熱痕跡があり、直径約0.36m（1.2尺）の円柱が立った状態で被災したことがわかります。

基壇の規模は、幅が約6.3m（21尺）、高さは北辺が0.5m、南辺が0.1m程度、礎石からの基壇の出は南北とも約1.4mです。基壇外装については、北辺で石を３段積んだ乱石積基壇を確認しました。基壇外装を構築する石材は凝灰岩や安山岩等、多様な種類を用いており、大きさもばらばらです。また、凝灰岩切石が自然石と混在することから、この乱石積基壇は奈良時代の創建当初のものではなく、創建当初の位置を踏襲しながら平安時代に再建したものと考えられます。

基壇の北辺と南辺で東西方向に延びる雨落溝では、瓦が捨て込まれた様子や、焼土が集中して堆積している様子を確認しています。また、基壇を南北に横断する暗渠を検出しました。東金堂院内部の雨水を南雨落溝で受け、暗渠を通じて北雨落溝に排水していた様子があきらかになりました。

今回の調査では、東金堂院北面回廊の建物と基壇の規模・構造があきらかになるとともに、その再建と変遷の様子もわかりました。東金堂院北面回廊は従来の復元案よりも東へ延び、東西100m以上となることが確定しました。また再建時も創建当初とほぼ同じ位置と規模を踏襲したことがあきらかとなりました。『興福寺流記』や興福寺を描いた絵画資料等から、東金堂院には、東金堂と五重塔のほかにも建物があったことが指摘されています。東金堂院の規模が従来の想定よりも大きくなることによって、東金堂院の内部構造を再検討する必要が生じるとともに、興福寺における東金堂院の性格を考える上で重要な成果を提示することができました。

10月15日（土）の現地見学会には1,120名が参加しました。ご協力頂いた関係者の皆様に御礼申し上げます。　（都城発掘調査部　垣中 健志）

調査区全景・五重塔を臨む（北から）